

2020. 5. 17 (日) マタイ 20:17~19

20:17 さて、イエスはエルサレムに上る途中、十二弟子だけを呼んで、道々彼らに話された。

20:18 「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます。彼らは人の子を死刑に定め、

20:19 異邦人に引き渡します。嘲り、むちで打ち、十字架につけるためです。しかし、人の子は三日目によみがえります。」

<説教>

「ガリラヤを去り、…ユダヤ地方へ入られた」(19:1) イエスと弟子たちはエルサレムを目指していました。

その途中、イエスは弟子たちに三回目の「受難予告」をなさいました。

20:17 さて、イエスはエルサレムに上る途中、十二弟子だけを呼んで、道々彼らに話された。

20:18 「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます。彼らは人の子を死刑に定め、

20:19 異邦人に引き渡します。嘲り、むちで打ち、十字架につけるためです。しかし、人の子は三日目によみがえります。」

既に学んだように、受難予告の一回目は、ピリポ・カイサリアの地で、ペテロの信仰告白直後になされました。

「そのときからイエスは、ご自分がエルサレムに行つて、長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならないことを、弟子たちに示し始められた。」(16:21)

二回目は山上での変貌の後、ガリラヤの地でなされました。

「彼らがガリラヤに集まっていたとき、イエスは言われた。『人の子は、人々の手に渡されようとしています。人の子は彼らに殺されるが、三日目によみがえります。』すると彼らはたいへん悲しんだ。」(17:22-23)

そして今回三度目はユダヤ地方で(19:1)、「エルサレムに上る途中」(20:17)でした。

それはこれまでのまとめであり、また一層詳しい啓示と言えるものでした。

イエスはまずご自身の「殺され」方を明らかになさいました。

それは「祭司長たちや律法学者たちに引き渡され」「彼らは人の子を死刑に定め」ということでした。

「祭司長たちや律法学者たち」とは、「祭司長たちと最高法院全体」(26:59)とも記されている、ユダヤ人の最高議会です。

イエスがユダヤ人の最高議会によって「死刑に定め」られるということは「神冒瀆罪」で有罪とされ、死刑を宣告されるということでした(当時のローマ帝国支配下では「神冒瀆罪」以外ではユダヤ人最高議会が死刑宣告をする権限はなかったようです)。

そして当時、ユダヤ人の死刑の方法は石打ちが一般的だったようです。

だからこれまでイエスが二度にわたつてご自分が「殺される」と言われたときは、それはユダヤ人たちから石打ちにされるのだと弟子たちは思っていたことでしょう。

しかし今度の三度目の告知によって、そうではないことが明らかになりました。

イエスは「異邦人に引き渡され」て彼らから「嘲」られ「むちで打」たれて「十字架につけ」られると言われたのでした。

「異邦人」とは先ほど触れたように、当時ユダヤ人を支配していたローマ人（具体的にはローマ皇帝の代理人、総督ピラトとその部下のローマ兵たち）のことでした。

そんな、ユダヤ人にとっては忌み嫌うべき「異邦人」ローマ帝国が採用した、しかも当時一番残酷で“非人道的”な死刑の仕方と言われていたのが「十字架」刑でした。

更に、「十字架につける」とは言い換えれば「木に架ける」ということです。

「死刑に当たる罪過があつて処刑され」て「木にかけられた者は神にのろわれた者」（申命記 21:22-23）だというのがユダヤ人の理解でした。

だから「十字架につけ」られるということは、言うなれば特別に神にのろわれた者として人々の前で最高に惨めで恥ずかしい姿をさらして殺される、ということでした。

ユダヤ人としては“神に呪われた人間”というこれ以上無い最高の不名誉、恥をイエスは負われるということだったのです。

ユダヤ人の手による石打ち刑なら、「神冒瀆」の重大犯罪人とはいえども一応はユダヤ人として扱われる、人間扱いされるということになるでしょう。

しかしもはやそれすら許さず、まず同胞ユダヤ人たちから捨てられ、忌み嫌うべき異教徒、「異邦人」の手に「引き渡され」、その「異邦人」からも「嘲」られ「むちで打」たれて、ついには「異邦人」流のやり方の中でも一番“非人間的”な「十字架」によって、「神にのろわれた者」として自分は殺されることになる。

そうイエスは弟子たちに告知しなされたのです。

「しかし私は虫けらです。人間ではありません。人のそしりの民的蔑みの民的です。」（詩篇 22:6）という詩篇を、また「その顔だちは損なわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた。」（イザヤ 52:14）というイザヤ書のみことばが思い起こされます。

そういうわけでこの時の弟子たちにとっては口にするのもおぞましく、とてもではないが聞いていられないような死に方、人間としての尊厳さえ奪われた死に方をする、そんな人間には想像もできない、考えられない、最低・最悪・最貧・最弱・最小なご自分の死に様をイエスは弟子たちに示されたのでした。

それは弟子たちがイエスにつき従って行く中で自分たちもそうなりたいと熱心に執念深いほどに願望、目指していた姿とは全く正反対の姿でした。

一回目、二回目の予告の箇所を学んだ時に見たことですが、イエスの苦しみや死の予告だけで弟子たちの心は驚きや恐ろしさおぞましきでもう一杯になってしまい、よみがえりの予告などとても聞けたものではありませんでした。

今回もますます「人の子は三日目によみがえります。」と言われた予告部分は“聞いても聞こえない”状態だったでしょう。

後によみがえられたイエスがエマオ途上の弟子たちに「キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったのでありませんか。」（ルカ 24:26）と言われたように、本当はこの栄光の「よみがえり」こそがイエスの苦しみと死の目的であり、苦しみと死を経てこそこの「よみがえり」だったのでありますが…。

それほどイエスの、特にこの三回目の「受難予告」は弟子たちの耳には聞くに耐えない、

心には受け入れるに耐えないものでした。

これまで学んで来たように、ペテロほかイエスの弟子たちの願いは、とにかくいつも「先の者」として人より偉く立派で取り分も多く、一番輝いていたいというようなことでした。

「後の者」みたいに人より小さくみすぼらしく取り分も少なく惨めでみっともないようなのは絶対に嫌だ、というわけでした。

とはいえ、そういう弟子たちは、すべてを捨ててイエスに従って来た人たちでしたから、いくら何でも自分の力だけでそうなることを目指していたのでもなかったわけです。

彼らは、「何をいただけるのでしょうか」とイエスに言っていますから、確かにある面ではイエスを頼みとし、神を頼みとしてもいたわけです。

それでもやはりその“イエスに従っている自分”が中心であり、自分の肉の願い、自分の利益が一番の願いだったのです。

それでイエスは「先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になります。」(19:30)と言われ、続けてぶどう園の主人のたとえをお語りになり「このように、後の者が先になり、先の者が後になります。」(20:16)と言って締めくくり、天の御国、すなわち神の御支配についてお教えになりました。

ご自分のしもべに何を、どれだけ与え、報いるか、それはすべて全く「良い(善い)」主なる神の自由な恵み、御意思によるのだ。誰が先か、誰が後か、それは人間が考え決めることではなく、人間の願い通りになるのではなく、人間の目に見える判断によるのではない。それは神の全く自由で全く善い御意思(みこころ)によるのだ。だから人間の目に先か後かどう見えようとも、人間の思いに遙かに勝って「後の者を先にし、先の者を後にする」善なる恵み深い神に信頼して、へりくだって神の御意思、神の召しに従いなさい。

そんなふうにはイエスは弟子たちを諭されたのでした。

ひたすら「先の者」であることを誇り目指し、「後の者」であることを忌み嫌い避けようとするあなたがたの意思は神の御意思とは遠くかけ離れている。それはわたしがこの地上で歩もうとしている道とは遠くかけ離れている。わたしはこれからますます父なる神のみこころに従って、わたしは「自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従」(ピリピ2:8)うという「後の者」の道を行こうとしているのだ。わたし「**たち**」はエルサレムに上って行くと今言ったではないか。あなたがたはそういうわたしに目を留め、つき従って来なさい。後の者を先にし、先の者を後にする、そのこともまた「人にはできないが、神にはできる」のだ。あなたがたはその神を信じ、自分(の肉の思い)を捨てて一番低くなり「後の者」になったわたしに従って来なさい。わたしは必ず父なる神によって栄光のうちに「**三日目によみがえらせられ(直訳)**」て「先の者」となる。そんなわたしとともに、わたしの栄光あるよみがえりにあなたがたをも与らせてあげます。それが「あなたがたの分」として備えられているのです。

そんなイエスの恵み深い招き、約束ががこの三度目の「受難予告」には特に込められていたと見ることができます。

そんな「親の心子知らず」ならぬ「イエスの心弟子知らず」状態だった弟子たちの愚かさ罪を耐え忍びつつ、同時にその罪を日々ご自分の身に背負いつつイエスはエルサレムに上って行かれたのです。

そのイエスご自身が、同じように今日も私たちにも呼びかけ、招いておられます。